

定價一銀

公私雜報
第九號

翻不
刻許

西垣文庫
文庫10
7290
9



特 文庫10
7290
9

伏稟

迷子 父落 落物 石の物 盗まを
及び諸賣もの等を多く廣くせし弘め或ら
問う便り代得たきり所々少しを遠慮ふ
く其もよりくの書林又も繪草子屋の事か
と委しく書きたしに遣わして其の速
出板し四方に告多知らせ中を多く
辰四月

公私雜報會社

西垣文庫



公私雜報第九號

慶應四年閏四月二十五日

○閏四月十四日御布告

別紙御書付鎮撫督府より被仰達之条御趣意
柄厚く相心得弥以之謹慎に罷在旨未々迄中諭
以様田安中納言殿被仰渡の事
朝廷寛典之御處置を以て徳川家名立被下付
一同謹慎に罷在旨先達て之為達置の然る處其
前後猶脱走の者共有之諸所屯集暴議相立の段
全く徳川家名に付疑念相抱き以て右之所業

よむ至りの我前件の始末みくいの主人□□恭順
一途の素意よむ相戻り自然結局之處置ゆ法遅
緩に相成り上下一同安堵の場に至り兼て中
間向後愈以て恭順心得違無之様未々迄篤と申
諭謹慎之實行十目同視の上を家名の勿論相續
知行高等速に御定裁に有之間聊疑念を抱はば
各箇恭順に罷在様
大總督官御沙汰之事

○
當夏御借米之儀當三月相達し以通四分米六分

金直段の儀に百俵に付八十兩の積に相心得い
布衣以上并百俵有餘の儀に金渡半減に相渡い
布衣以下御役料の儀に當春之振合を以張紙直
段皆金百俵以上之分に三分一相減に相渡い
遠國奉行同支配向并在住の者に何れも是迄之
通り減し方無之積右米に此節よりお渡し金渡
之分に追うて相渡あつて有之い
當節御勝手向追々切迫に付高に附い法扶持
の外法役扶持に手當扶持等當五月分より三人
扶持以下に三分一減右以上を半減お渡りて

有之小事

○四月十二日 朝廷御布告之寫

先般 御誓被為在 御宸翰を以て布告は
仰出の通り 朝廷御一新の時又舊く總く簡易
質畧の 思召を以て御國體御更張は為在度と
の事依りて諸藩はあつても御趣意を奉體認
速に政令を大變革致し奉安 宸襟の様無之て
不相濟次第勿論の事は假令慶元以還受封
之國法制令たりと雖も當今時勢は不相合の
儀に斷然廢棄する一 一新の基本をお立 朝廷

諸藩一致の全力を尽し以てこそ日新の 聖業
相顯るを以て事は有之然るに 朝廷將門の
政權を法取返し遊ひたり復古とすべし
只 朝廷の事ものと相心得の者も有之我々
相聞へ甚以て謂ふ事は抑各藩 敵旨を
奉體認一新の基本を建るに第一舊習因循を打
破し賢才を挙げ國政を革むるにあり然るに諸
藩多くは任撰を主とせし専ら門閥を以て政柄
を為執りて隨て舊習難改姦吏難除の患は有
之我々今般於 朝廷に攝籙門流を以て廢し

事有之のへを諸藩に於て世録家格を以て政
事を専らにし方今の事体は不相合或は庸劣其
任は堪ざる向るに速に廢黜し非常拔擢を以て
賢才を登庸し國政十分は改正を多しむる
皇國一躰復古の御趣意貫徹を以て御沙
汰の事

右之通旨 仰出の上を諸藩速に实效お立
つて若し等閑に相心得猶因循に有之向の
品より是法取糺して有之より追々諸
國巡察使に差向改正の政績を以て 聞食の

問此旨お心得つての事

○頃日上總邊の或人より左の書付を
得より其出處は不詳

法令之事

一義軍府と唱へし儀は一同我徳川氏の御成行
を憂へ遙るに此地に來り

御家名并法領地の立方を伺ひ居暴行を以て
しは者無之筈より名義を下しし儀あり若し
酒色に迷ひ不行跡の振舞を以てしは者有之
はりの義軍府との決し難中右様ある所存

のりの多人數の内一人をとり節の總軍
 の名を汚し土人の對し面目も無之次第故相
 共々吟味以多し不行跡の振舞等以たし以者
 見受以とも早々取押へ嚴重に所置致を辱く
 以事

此度當地に罷越ゆるの共の真に忠義の者と
 お頼に是より事を謀り以積りの慶右の者の
 内若し命令に相背きの者有之ゆる終に賊
 名を蒙るる者も無之一人の心得違ふる
 威名も行をせざるや相成りゆるの大義瓦

解以多し是まど何の為に罷越し以裁條理相
 立に徒らに嘲り以受者後來の物笑ひに成
 る以る能々相慎に義軍の兵威一際お立以様
 銘々厚く心掛る事

一物見遊山あつ所用あくし以他出以るし以儀
 等決し以不相成以事

但し無據用有之他出以る以節以事柄
 中立に隊長の免しを受たて罷出以事
 一土人の對し權威を震ひ人望を失ひ以儀決而
 致る事以事

一萬事隊長の命を守り一己の了簡お立申間敷事

但し不正の儀有之の節の頭の所行といふども相咎め其段中出不苦の事

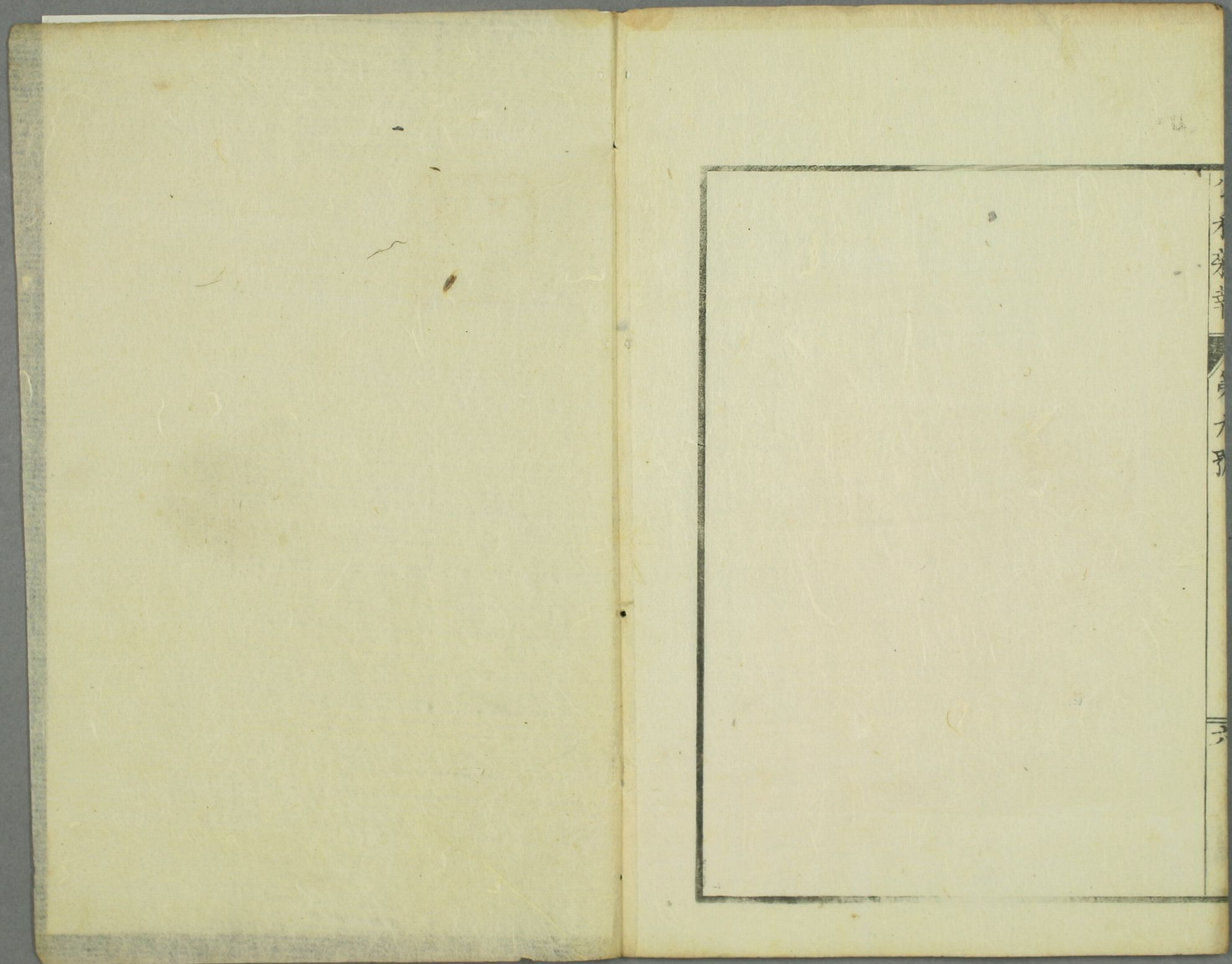
一番兵の總軍の眼目有之の節若し懈怠の多し以節の非常の災ひ一同にかゝる毎くの間急度心付居ゆり了致の事

右之條々急度相守至一同辛苦に堪への様了致の若し相守を兼ゆりの有之の節の嚴重の咎に申付の間其段お心得不肖の某乃命令に服従に

多し兼ゆり者の子細よく歸府の事を以様取計ひ可遣の間名前早速に聞て歸府相願ゆり了致の若し後來刑罰に當るに節に至り彼是議論を立ゆりの曲度其者に有之の儀と存の間只今の内篤と勘辨決着ゆり了致ゆり尤も何時までか歸府相願ゆりの聞届ゆる左様で相心得の事

辰四月

隊長某



卷之六

六

